

長野県更埴市

屋代遺跡群 **北中原遺跡**

—— 市営住宅屋代団地建設に伴う発掘調査報告書 ——

1 9 8 7

更埴市教育委員会
更埴市遺跡調査会

序

この度、市営住宅屋代団地建設に伴い、埋蔵文化財「屋代遺跡群北中原遺跡」の発掘調査が行われました。

当該地の北には、多くの住居址が発見された城ノ内遺跡、南には全国的にその名を知られた更埴条里水田址があり、両者の中間となるため、どのようなものが発見されるか注目される地域でありました。調査の結果水田址であることが判明いたしました。千曲川自然堤防上のほぼ最高地点となる当地が、平安時代に水田として利用されていたことは、すでに大規模な灌漑工事が行われていたことを物語るものであり、大変興味深い結果であります。

遺跡周辺は今後、中央自動車道、関越自動車道の開通に伴い、急速に変貌を遂げることが予想される地域であり、私たちの先人が残してくれた貴重な文化遺産を、後世へ伝えることが私たちの責務と考えております。

最後に、無事発掘調査が終了できましたのは、市建設課の方々、作業に従事いただいた作業員のみならずの御協力と御努力の賜であり、ここに深甚なる敬意を表わすと共に今後の発掘調査への御協力をお願いいたします。

昭和62年3月31日

更埴市教育委員会教育長
更埴市遺跡調査会会長

安藤 敏

目次

例言

I 調査に至る経過	1
II 調査の概要	2
III 調査日誌	3
IV 遺跡の環境	4
V 遺構と遺物	5
VI まとめ	10
VII 図版	11

- 1 本書は、昭和61年5月26日から6月14日の間に、市営住宅屋代団地の建設に先だって実施された発掘調査報告書である。
- 2 本書の編集は、佐藤信之が行い、実測トレスは田中富子、佐藤が行った。
- 3 執筆は佐藤が行った。
- 4 本調査の遺物、実測図、写真はすべて更埴市教育委員会に保管されている。
なお本調査関係の資料には、北中原遺跡を略してKNHと表記した。

I 調査に至る経過

市建設課より照会のあった市営住宅屋代団地（400㎡）建設に伴う発掘調査について、市教育委員会では、発掘調査費用2,800,000円、予定調査期間25日間とし、建設予定は61年度秋であったが、出水が予想される6月末までには現場における調査を終了するよう調査計画を立て、市建設課に提出し、調査の準備を開始した。

61年度に入り、5月16日、市建設課より更埴市遺跡調査会に遺跡の保護について依頼があり、5月19日、更埴市と更埴市遺跡調査会との間に、発掘調査業務委託契約が締結された。5月21日、埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、5月26日より重機で表土を剥ぎ、翌日より作業員が入り、発掘調査を開始した。

当該遺跡は、集落址である城ノ内遺跡と、更埴条里水田址との接点にあたるため、集落址、水田址双方の遺構が検出されることを想定し調査を開始したが、水田址のみの検出であった。したがって現場における調査は6月14日に17日間で終了したため、ただちに委託契約の変更を行い、発掘調査費用を2,000,000円に減額した。



第1図 遺跡遠景

Ⅱ 調査の概要

- 1 発掘調査委託者 更埴市
- 2 発掘調査受託者 更埴市遺跡調査会
- 3 発掘調査実施者 更埴市教育委員会・更埴市遺跡調査会
- 4 発掘調査場所及
び土地の所有者 更埴市大字屋代937-1 更埴市
- 5 発掘調査遺跡名 やしろ 屋代遺跡群 またなかほら 北中原遺跡 (市台帳No.31-19)
- 6 調査の目的 公共事業、市営住宅屋代団地建設に伴う当該遺跡の記録保存
- 7 調査期間 昭和61年5月26日～同年6月14日(17日間)
- 8 調査面積 400㎡以上
- 9 調査方法 グリッド調査方法(3×3m)
- 10 調査費用 2,000,000円
- 11 調査会の構成
 - 会 長 和田 基 更埴市教育委員会教育長(前任)
 - 安藤 敏 “
 - 理 事 田沢祐一 更埴市議会
 - 山崎 衛 更埴市教育委員会教育委員長
 - 松林光幸 更埴市区長会長
 - 寺沢政男 更埴市役所総務課長
 - 監 事 武井隆義 更埴市社会教育委員会委員長
 - 関 京子 更埴市会計課長
 - 幹 事 武井豊茂 更埴市教育委員会社会教育課長
 - 山崎文夫 更埴市教育委員会社会教育係長
 - 矢島宏雄 更埴市教育委員会社会教育主事
- 12 調査団の構成
 - 団 長 安藤 敏
 - 調査指導 森嶋 稔 上山田小学校教諭
 - 調査担当 佐藤信之 更埴市教育委員会社会教育課
 - 調査員 山根洋子 更埴市教育委員会社会教育課
 - 現場作業員 牛沢一子 岡田栄子 久保啓子 黒崎七郎 小林芳白 坂口城子
 - 高野貞子 田中富子 富沢豊延 松本秋夫 南沢郷土 村山 豊
 - 整理作業員 青木美知子 牛沢一子 小林昌子 田中富子
 - 事務局 武井豊茂 山崎文夫 矢島宏雄 佐藤信之 田中啓子 山根洋子
(社会教育課)

Ⅲ 調査日誌

遺跡が集落址と水田址の接点にあたるため、双方の遺構が検出されることを想定し、5月26日より調査を開始した。重機により表土を除去した後、5月27日より作業員が入り、遺構検出面まで掘り下げた。その結果調査区中央より畦畔が検出され、水田址であることが分った。水田址の調査を進めるにしたがって、水田面からは畝状の遺構が検出された。5月31日井戸址の掘り下げを始め垂直に2.3mほど掘り下げたが底部に至らず危険となったため掘り下げを中止した。6月2日受水槽部分の調査を開始し、畦畔を検出する。水田址の調査がほぼ終了したため6月5日より水田址にトレンチを入れ、下部の調査を行う。下部からは、古墳時代から平安時代の土器片と共に翡翠の勾玉が出土した。遺構は畦畔と重なって溝1本が検出されたのみであった。現場における作業は6月14日に終了し、7月21日より整理作業を開始した。

調査日程

5月26日	重機による表土除去開始 基準点測量実施
5月27日	作業員入り掘り下げ始める 畦畔検出
5月28日	水田址より畝状の遺構検出
5月31日	井戸址掘り下げ
6月2日	受水槽部分からも畦畔検出
6月5日	水田址にトレンチを入れる
6月10日	水田址下部より、翡翠の勾玉出土 畦畔の下より溝検出
6月14日	現場における作業終了
7月21日	整理作業開始 発掘調査日数17日間 調査員 延べ 33人 作業員 延べ163.5人

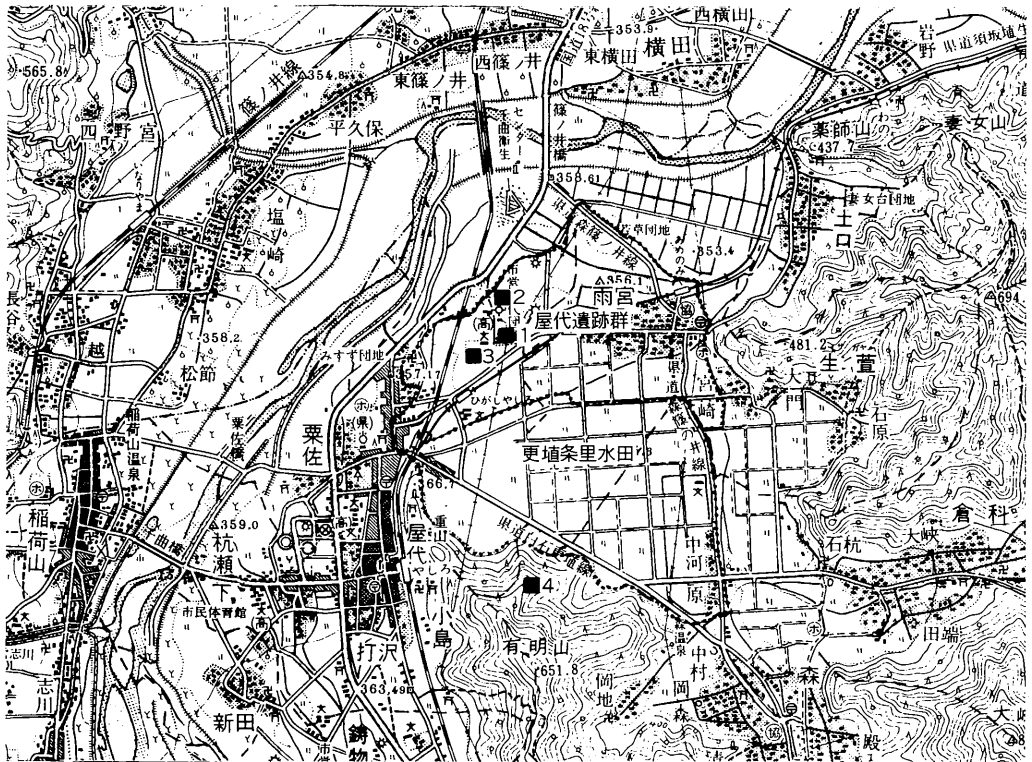


第2図 発掘作業風景

IV 遺跡の環境

上田より北流を続ける千曲川が善光寺平に入り、その流れを大きく東へと変える部分には、広大な自然堤防が形成されており、北中原遺跡はその東岸に位置している。この自然堤防は、東西3.5km南北0.6kmほどの規模を有するもので、弥生時代から中世に至る集落が営まれた更埴市屈指の大遺跡であり、屋代遺跡群として把握されている。この自然堤防によって画された南側は、学術的調査が実施された条里水田として知られる更埴条里が広がっており、さらに南の山々は、善光寺平で前方後円墳が集中する地域となっている。したがって、生産基盤、集落、墓といった当時の生活を知ることのできる貴重な遺跡が1ヶ所に集中した地域であり、しかもそれが良好な状態で残されている地域である。

北中原遺跡は、自然堤防のほぼ中央に位置しており、標高357m前後を測ることができる。北には城ノ内遺跡、西には馬口遺跡といった集落址が存在しており、南は更埴条里水田となるため、この遺跡部分が集落址と水田址の接点にあたると考えられていた部分である。したがって両者の関係を知る上で貴重な地点といえる。



1.北中原遺跡 2.城ノ内遺跡 3.馬口遺跡 4.森將軍塚古墳

第3図 遺跡位置図 (1/50000)

V 遺構と遺物

井戸址 (第4図・図版3)

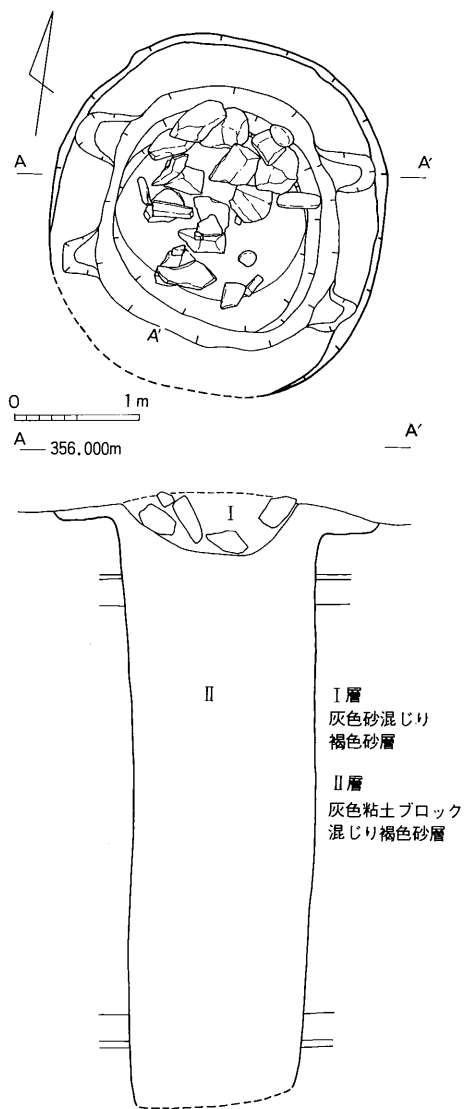
住宅棟調査区東側中央部より検出された遺構で、遺跡の上面を覆っていた褐色砂層を遺構中に持つことから、検出された遺構の中で最も新しいといえる。検出面には15cmほどの角礫十数個が集中しており、井戸に利用されていたものと思われる。2段に掘り込みが行われており、上部は直径135cm、検出面よりの深さ5cmを測り、真円に近い。段となる部分には東西に対をなすよう幅15cm深さ5cmほどの掘り込みが見られる。井戸枠の痕跡であろうか。下部は不整形円で、深さ230cmまで掘り下げたが底部に至らず、危険になったため掘り下げを中止した。上段との接点で直径95cm、最深部で75cmとほぼ垂直に掘り込まれており、壁面も平端に整えている。2段による掘り込みは、上段が井戸枠を施すためのものであり、下段は枠組等を施すことなく、そのまま井戸として利用されたものと理解できる。

出土遺物はまったくなく、所属する時期は分らない。

1号畦畔 (第5図・図版1・3)

住宅棟調査区のほぼ中央を南北に走る畦畔で、正確にはN-7°-Wに延びている。台形状を呈しており、上面は平坦に整えられている。上部1.2m下部2.5m最大高50cmを持ち、灰褐色粘質土により構築されたもので、畦畔下には逆台形に幅1m、深さ0.4mほどの溝が1条掘られている。畦畔下に溝が存在するものは、隣接する馬口遺跡においても検出されており、水路から畦畔へと地割の手段が変化したものと考えてきた。しかし、溝内の堆積状況を見ると、水が流れた形跡がまったくなく、畦畔下部と同一の土層となっていることから、溝は水路としての利用ではなく、畦畔構築時に掘り込まれたものであり、畦畔の下部構造とも考えられる。

盛土内より僅かに土師器、須恵器が出土している。図示できたものはいずれも須恵器で、底部がヘラオコ



第4図 1号井戸址

シの坏(1)、宝珠形つまみを持つ蓋(2)、格子目のタタキが施された甕などである。

2号畦畔

1号畦畔に直角に接する畦畔で、N-81°-Eに延びている。接点となる部分が土塚により壊され、また崩壊が進んでいるため、形状は不明な点が多いが、幅約1.5m残存高15cmほどでかまぼこ状となっている。東へ進むにつれて幅が広がり、水田面との区別が付かなくなる。注目されることは、畦畔下にも水田面が及んでいる点である。このことは恒久的な使用を意図した1号のような畦畔ではなく、当初より移動を予想した畦畔であったと考えられる。

出土遺物はない。

3号畦畔(第5図・図版3)

受水槽部分の西端より検出された遺構でN-5°-Wに延びている。断面形は底辺の広い三角形に近く、幅1.3m、高さは最大

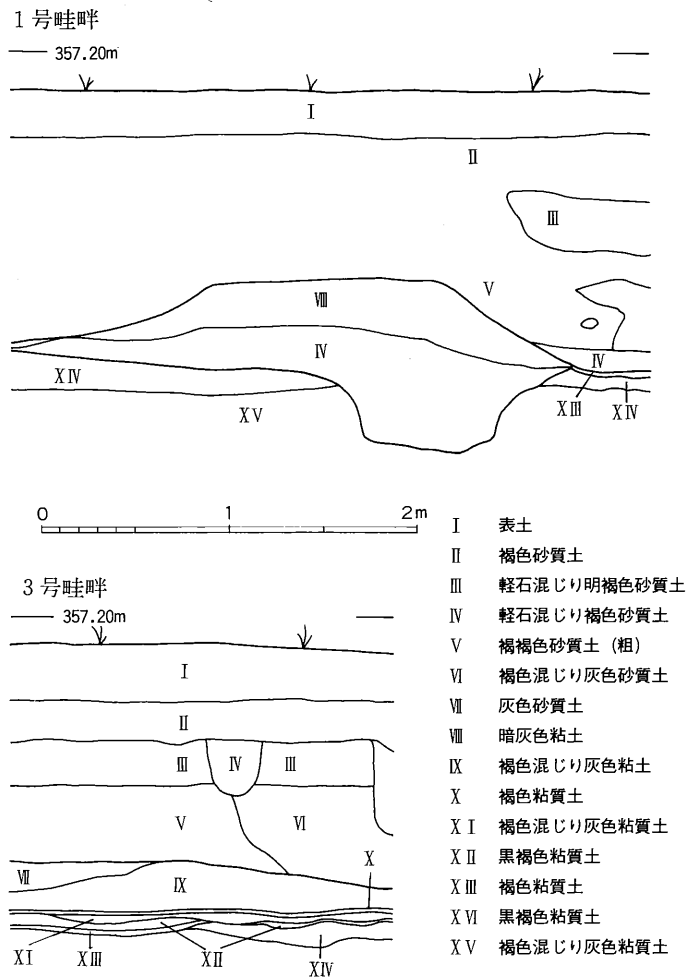
20cm平均10cmほどで、灰褐色粘質土で構築されている。下部に溝等の掘り込みは見られないが、2号畦畔同様に水田面が畦畔下に存在している。

ほぼ中央部にはこの畦畔と直交する畦畔が存在している。形状規模共3号畦畔と同様であったと思われるが、崩れが進んでおり、西側は調査区外となるため明確ではない。ただ、進行方向が2号畦畔と一致することから、同一の畦畔となる可能性もある。

出土遺物はない。

水田面(図版2・4)

調査区全域より水田土壌が検出されている。特に1・3号畦畔の東側では、畦畔に平行し畝状の痕跡を認めることができる。遺跡上部を厚く覆っていた褐色砂層を取り除くと、水田面に20cm前

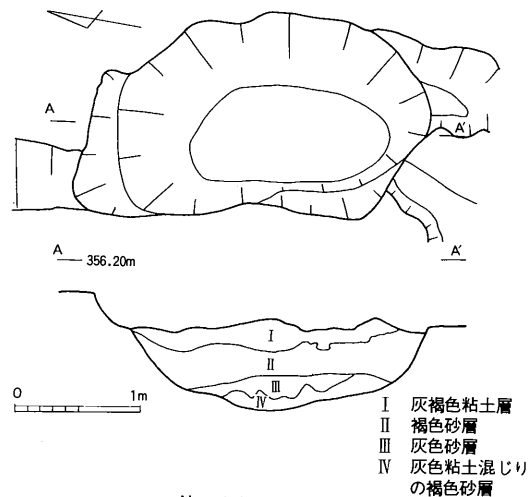


第5図 1号・3号畦畔断面図

後の間隔で幅15cm深さ5cmほどの浅い掘り込みが幾筋も検出された。この底となる部分には鉄分の沈殿層が水平に見られ、その上に暗灰色粘質土がかまぼこ状に並んだ断面形を示している。原則的には平行に並んでいたものと考えられるが、失われている部分も多い。

1号土坑（第6図・図版4）

1号畦畔と2号畦畔の接点となる部分に検出されたもので、畦畔を切って作られている。長軸を南北に持ち、規模は2.9m×1.5m深さ0.6mほどである。覆土の上部は、畦畔と同一の灰褐色粘土層によって覆われているが、その堆積は均一ではなく、その下は遺跡を覆っていた砂層が堆積していることから、砂層が流入した際、畦畔の一部が崩れて堆積したものと理解できる。



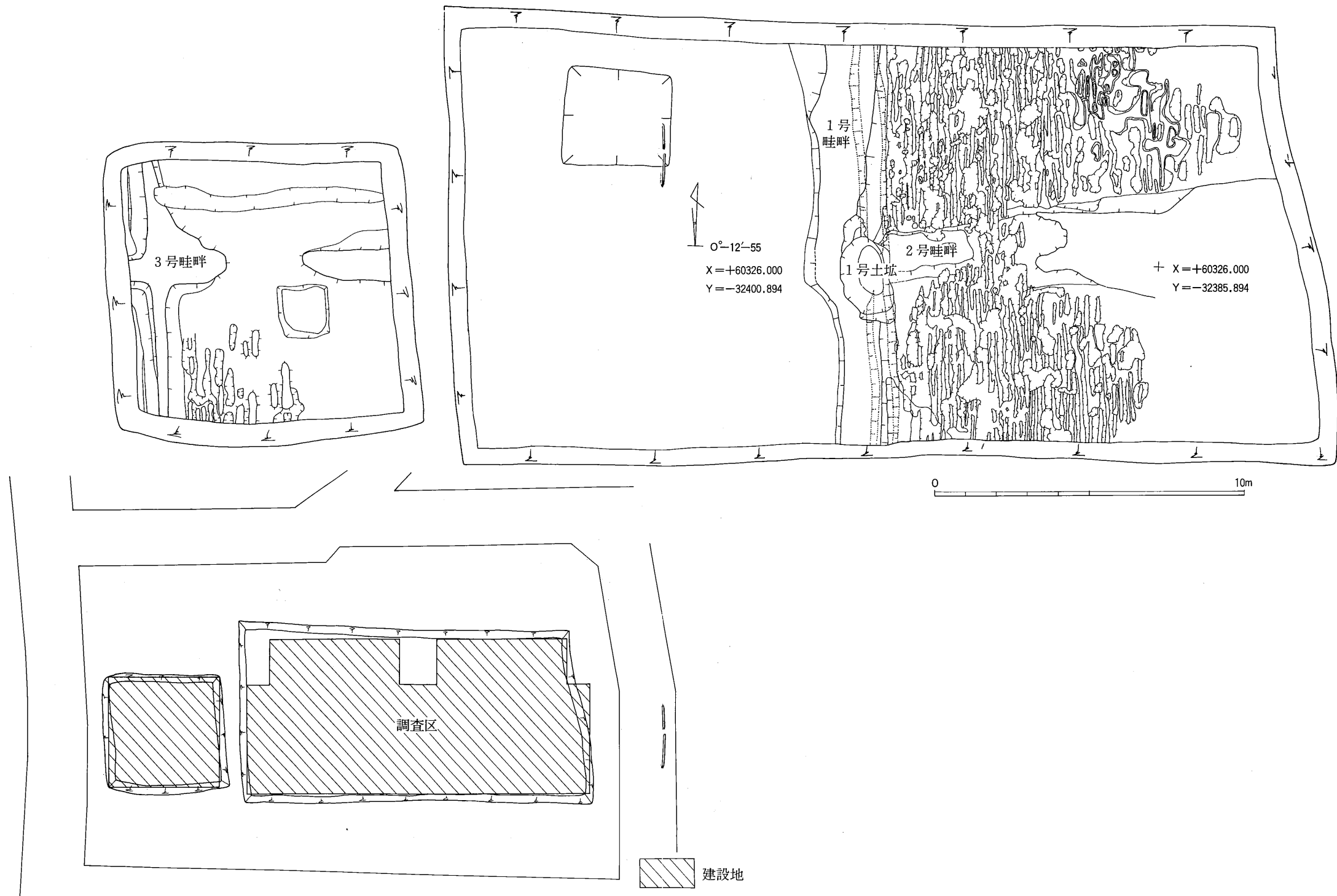
第6図 1号土坑

出土遺物は、馬と思われる草食動物の歯と、僅かな土器片が出土しているが、本遺構との関係は明らかでない。

その他の遺物（図版1）

水田址の調査であり、出土遺物は少ない。水田面より出土した遺物と、水田面下より出土した遺物があるが、原位置を保っていたと考えられる遺物はなく、両者に差異を見出すことはできない。したがって遺物は混在しているものと判断した。

1は口縁部、底部を失っているが、内外面をハケによって調査した小形器台である。2は二段口縁となる壺の一部であり、胎土には金雲母を多量に含んでいて、ハケの後ミガキを施している。1と共に古墳時代前期の所産である。3は内面黒色処理された土師器坏で、底部は糸切りの後、周囲をヘラケズリしている。4・5は須恵器坏であり、共に口縁部を欠いている。底部は4が糸切り、5がヘラオコシとなっている。6は須恵器坏蓋で、つまみ部を失っており、口縁部はくちばし状を呈し、やや外へ開いている。7は外面に格子タタキを施した須恵器の甕である。胴下半部には回転台を利用した3条の、沈線ともいえるナデが見られる。8は須恵器壺の底部で、ロク調整されており、自然釉が付着している。9は安山岩の自然石を利用した凹石である。凹は敲打によって生じたものであり、周囲にも敲打痕が認められる。10は先端を僅かに欠いているがほぼ完形の黒曜石製有茎石鏃である。9の凹石と共に縄文時代の遺物と考えられる。11は硬玉製の勾玉である。厚さ7mm直径26mmほどの半円形を作り、弦となる部分の中央に僅かな凹みをつけたもので異形品といえる。穿孔は両側から行われており、ミガキもていねいで光沢を放っている。



第7図 調査区全体図及び調査区配置図

Ⅵ ま と め

調査は、集落址と水田址が存在するという想定で開始したが、集落址の検出はなかった。水田址を見ると、まず東西に延びる1号畦畔が目止る。底部幅約2.4mの台形で、東側と西側では水田面に約20cmの高低差があり、東側で計れば高さ約40cmを計れる。この規模から見て、当然条里あるいは坪の境界をなすものと考えられる。また昭和60年に隣接する馬口遺跡で発掘調査が行われた際、N-7°-W方向に幅4mにも達する畦畔が、今回の調査同様砂層直下から検出されており、その規模からして条里の境界と考えることができる。この畦畔と1号畦畔との間隔は約96.5mとなっており、条里地割の基準といえる1町間隔には一致してこない。仮に、段を画する畦畔であったとし、長地割(6歩=10.8m)を考えれば、9に極めて近い値が得られるが、10.8m東には坪を画する畦畔はなく、1号畦畔の性格はつかめない。

調査区西側で検出された3号畦畔は、底部幅約1.3mで1号畦畔との間隔は22.2mを計ることができる。これは12歩に近い数値であり、半折型に一致する。

このように、条里坪といった法則的な設置状況は見いだすことはできなかったが、段を画する6歩12歩といった数値に極めて近い値を見ることができ、興味深い。

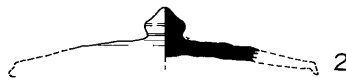
また、今回検出された畦畔は、昭和36年から昭和40年に実施された更埴市条里遺構の調査と比較すると、その方位は極めて近い方向を示しているが、しかしその位置には大きなずれが見られる。この調査の分類に従えば、1号畦畔は条里を画したものとなるわけであるが、法則に定まった設置を見い出すことができなかった。このことはすでに「更埴市条里遺構の研究」^{註1}にも記されているが、更埴条里を理解する上で重要な問題といえよう。

1号畦畔の下部からは溝状の掘り込みが検出されているが、同様のものが上記した馬口遺跡の畦畔下部からも検出されており、水路としての利用から畦畔へと変化したものと考えていた。しかし、溝状の掘り込みには水の流れた痕跡がまったくなく、覆土も畦畔を構築する土と同一のものの一層であることから、畦畔の下部構造とも考えられるが、資料の増加を待ち、さらに検討しなければならない問題といえよう。

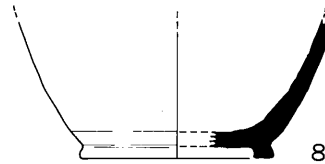
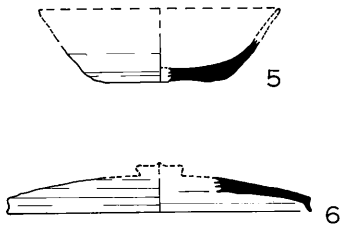
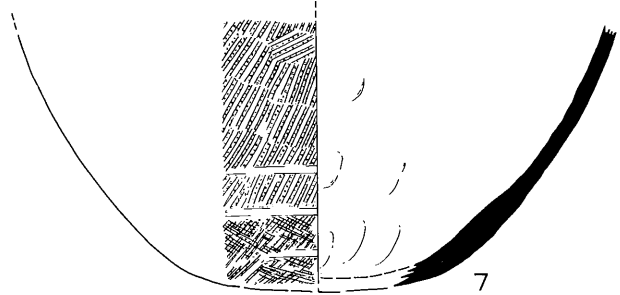
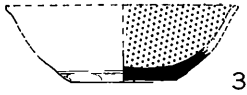
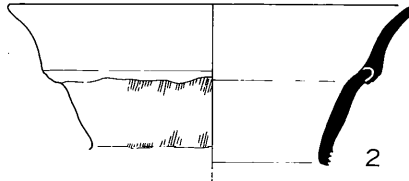
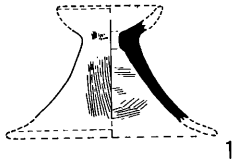
最後に本調査にあたっては、発掘調査に全面的に御協力いただいた市建設課、作業に参加いただきました作業員みなさまに心からなる謝意を表し、今後の発掘調査への御協力をお願いするところであります。

註1 1968年 寶月圭吾他『地下に発見された更埴市条里遺構の研究』長野県教育委員会

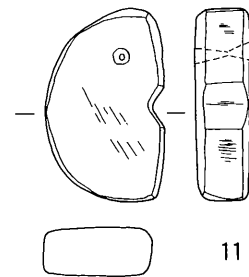
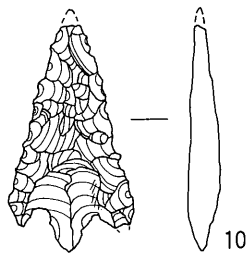
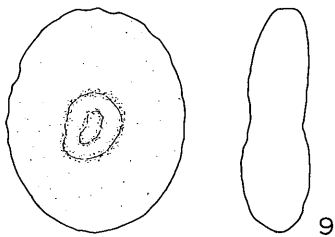
1号畦畔



その他の遺物



0 10 cm



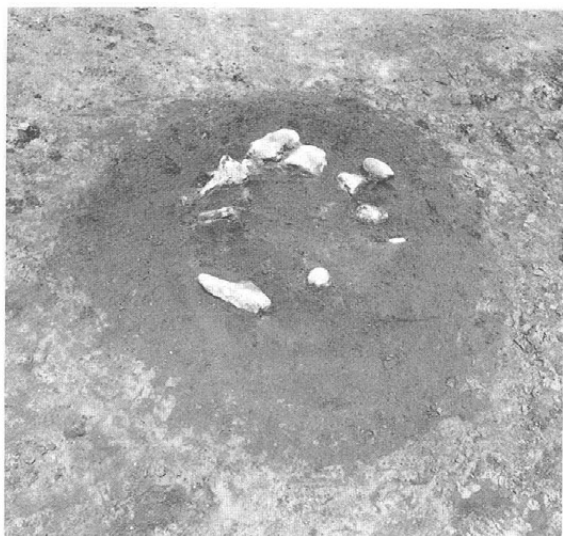
10・11は原寸



水田面検出状態



水田面検出状態(受水槽部分)



井戸址検出状態



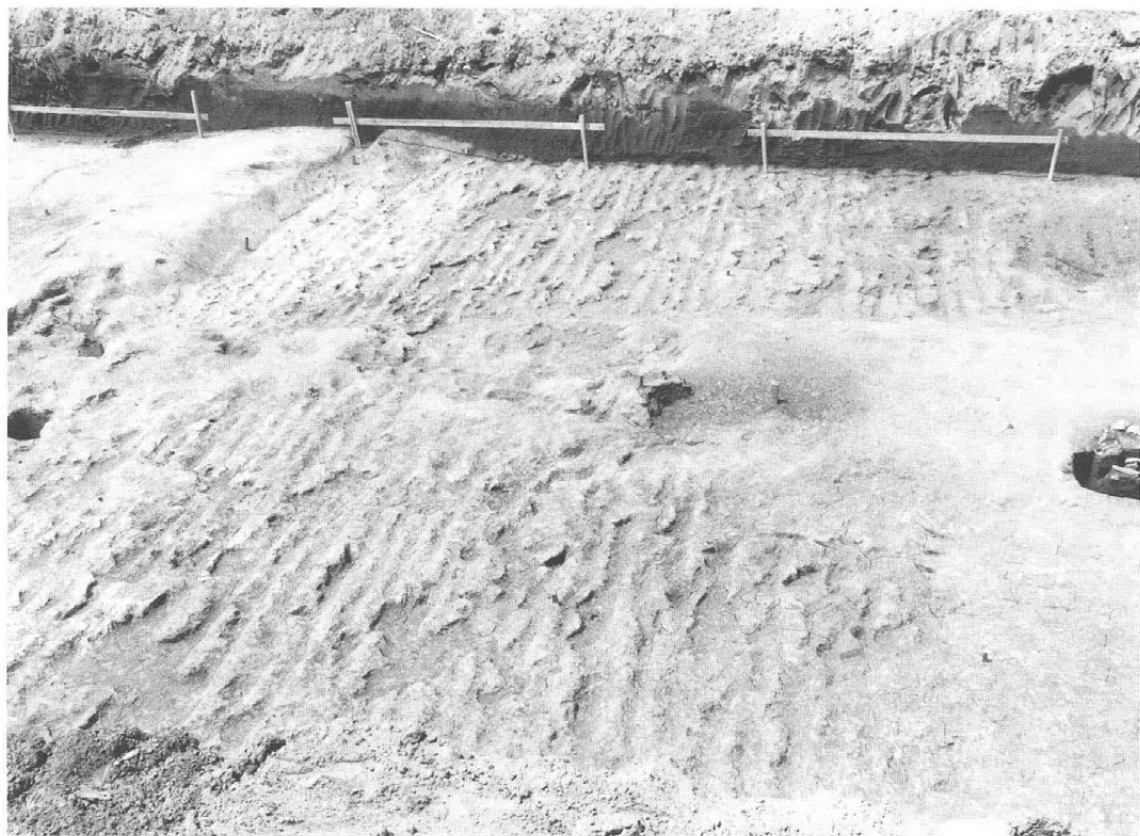
井戸址



1号畦畔断面



3号畦畔断面



畝状遺構



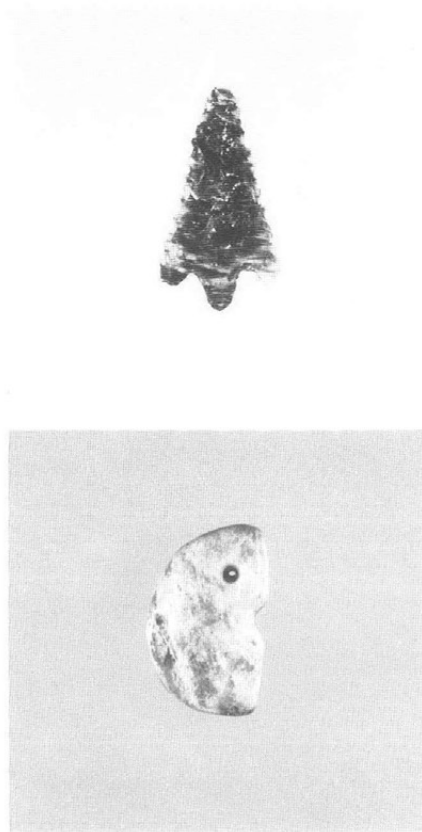
土坑



1号畦畔下部の掘り込み



水田面下の遺構検出状態



屋代遺跡群北中原遺跡—市営住宅屋代団地建設に伴う発掘調査報告書—

発行日 昭和62年3月31日

編集 更埴市遺跡調査会

発行 更埴市教育委員会

〒387 長野県更埴市大字杭瀬下762-2番地

TEL (0262) 73-2791

印刷 信毎書籍印刷株

〒380 長野市西和田470

TEL (0262) 43-2105
